

- 附、刀を帶徘徊無用之事。
- 一、振廻之儀、縦雖爲富者、一汁三菜不可過事。
- 一、家作諸事相守儉約、成程輕く可致事。
- 附、なげし作・杉戸附書院・くしがた・彫物・組物無用。床ぶち・さん・かまち塗候儀、并から紙はり付令停止之。但、上使宿一二軒は各別之事。
- 一、嫁娶之刻、萬端成程輕可致之事。
- 附、刀・脇指等遣候儀無用之事。
- 一、女小袖・同帷子、定之直段より高直之表、商賣不可仕事。附、何方より蒔繪道具雖誂之、惣梨子地・惣金之粉だみ・惣切かね之道具、向後一切不可仕事。
- 一、葬禮・佛事之儀、不可過其分限事。
- 右條々堅可相守之、若令違犯者可爲曲言者也。

寛文八年七月六日 御印

一〇町方衣食住・祝儀・勸進之儀御定

覺

- 一、町人衣類、絹・袖・木綿・布・郡内嶋・ひの絹・御國絹・ちびみ・八丈但京織・木綿嶋之類・唐木綿不苦事。
- 一、町中振廻、一汁三菜香物共、酒二遍たるべき事。
- 一、鶴・白鳥・他國魚・木具出候儀、并盛交菜、後段無用之事。附、他國客人并御家中歷々振廻候共、右御定之通可相守之、重菓子など出候儀は不苦事。
- 一、從跡々如被仰出、諸事過分致買込、直段高直に罷成候様に仕儀、并侍と申合商賣物、一切御停止之事。
- 一、品々毛織・天鵝絨・縞子・縞珍等之卷物之類、綸子・紗綾・綿綿・絹縮・明石縮、并女中小袖一端に付百三拾目、同帷子一端に付四拾三匁より高直成表、商賣一圓御停止。但、右毛織其外卷物、武器・馬具之用に立申程きれに而賣候儀、并女帯は不苦事。
- 一、御家中侍屋作、二間梁庇六尺、長屋は二間半梁、臺所は三間梁、并なげし作・杉戸附書院・くしがた、床縁其外さん・かまち等塗候儀、金銀繪座敷、又は手こもりたる儀、一切仕間敷旨被仰出候條、若右御定を背き候作事誰々好候共、會而請取間敷由、大工中へ急度可被申付事。

- 一、寺方作事二間半梁、しころ庇一間半に棟作たるべし。臂木作其外彫物・組物等之結構、無用之由被仰出候間、是又大工中へ可被申渡事。
- 一、公儀へ上り候外、進物樽下之爲用所誰々誂候共不仕様、酒屋・桶屋中へ急度可被申渡候。但、柳樽は不苦事。
- 一、百姓之衣類、紅紫之外何色に而もかたを不付、無地に染候様に、紺屋中へ可被申渡事。
- 一、正月之はご板・ばい并雛之道具、五月之菖蒲刀・冑など、金銀押箔一圓無用之事。
- 一、年頭・五節句等之祝儀、音物贈答無用。但、一類之内親方は、輕遣候儀は心次第之事。
- 一、正月之餅、面々祝計かろく可仕事。
- 一、嫁娶・新宅・前髪を取候祝儀、并二日寄合之刻振廻、一圓無用之事。

- 附、嫁娶之節一類中祝儀、柳樽か樽代に而取かはし不苦。一類之外は無用之事。
- 一、諸勸進に入候儀無用之事。但、入候は而不叶節は、町肝煎迄斷可受差圖事。

右被仰出候通無相違様に、町中急度可被申觸者也。申七月六日

一一浪人等抱置候儀御定

- 浪人等抱置候斷書付、先規よりの文言之外可書加覺
- 一、切死丹宗門本人、又者本人同事之者之ために服忌有之類族、并鞆・男に而有之哉否之事。
- 一、所持之鐵炮有無之事。
- 右之通たるべく候。若是等之族有之ば、其品夫々御奉行入迄可相斷儀勿論之事。

以上 己巳正月 日

一二町人目安差上候儀御定

覺

- 一、町中之者共より、公事沙汰に付目安之儀は、如先規其町々肝煎以添書、町奉行迄可上之。縱令直に言上仕度儀有